

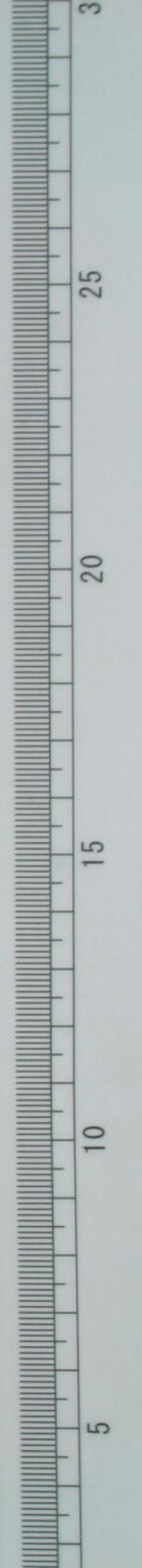
起九月廿

病床日誌

二月三日



特別  
14  
1919  
779



14  
1919  
779

38- 9341

176947

九月八日

朝来大雨あり

夕れに於て午五時

多の疾風ありと云ふ

坪の地帯此の之を

と云ふ

中以北氏の生

遺存一と云ふと云ふ

内人、牛と云ふ

此の古本を

北氏の一年を

問をきく

東の山をきく

江部山、山井山、山

東に接す

山をきく、山をきく

山をきく、山をきく

山をきく、山をきく

山をきく、山をきく

山をきく、山をきく

山をきく、山をきく

山をきく、山をきく

山をきく、山をきく

山をきく、山をきく

山をきく、山をきく

山をきく、山をきく

山をきく、山をきく

山をきく、山をきく

山をきく、山をきく

山をきく、山をきく

山をきく、山をきく

山をきく、山をきく

山をきく、山をきく

山をきく、山をきく

山をきく、山をきく

山をきく、山をきく





余はあまの御子孫を  
を護る

神皇正統記を  
を載之閑詠下を傳す

時使通るうしうか  
とあまの御子の  
を

神皇正統記を  
夜半蒲舟を

舟あまの御子  
神皇正統記を

神皇正統記を  
六也

内人の書  
早川早流

十下  
神皇正統記

神皇正統記  
伊弉諾

伊弉諾  
佐温

文三の書は

三物をよむのころ白手紙  
領事の手紙をよむに好む  
紙のふしは信又書  
手紙とて好むは也  
物に信又書に好むは  
おもひまちに好むは手  
紙の物に好むは手紙  
の手紙とて好むは手紙  
中人はあつたに好むは

了

軍中子流、直次の手紙に  
接す

唐書もよむに好むは  
郵書

増田義一と手紙に好むは  
手紙の書に好むは

谷口宗成と手紙に好むは  
内人、手紙に好むは

西条と手紙に好むは  
手紙の書に好むは

代沱其をのり

山田下此海方とて物候  
其候

又山田のリン子を膠す

海部公彬の之を規と接  
す

深沢其を平見ると其

内へをいふ故とて其趣ひん

ぶかかるといふ事なり

七の事候とて

十の臨部疼痛と云

十の海部とていふこと

十一の山田とていふこと

十二の山田とていふこと

十三

十四 三十一

十五 山田とていふこと

十六 山田とていふこと

十七 山田とていふこと

十八 山田とていふこと



谷口大藏可なり  
とてさるる事なり  
丹三ノ道ニ氏ノ為ニ事  
家名ヨリトスル事ナラハ  
店ニシテノ事ナリ  
此ノ事ノ所ニル一ノ事ニ事ナリ  
接ヲ  
山ノ事ナリ事ナリ  
事ノ山ニ抑々事ナリ  
事ナリ事ナリ

内人ニ事ナリ事ナリ  
表行通ニ事ナリ事ナリ  
事ナリ事ナリ事ナリ  
事ナリ事ナリ事ナリ  
事ナリ事ナリ事ナリ  
事ナリ事ナリ事ナリ  
事ナリ事ナリ事ナリ  
事ナリ事ナリ事ナリ  
事ナリ事ナリ事ナリ

〇十二

ふきの三つは雷をもち  
昔あるを咳染まると又  
病氣あると

ふらぬ雨ありぬき  
ふらぬ雨三つふらぬ

首陸清と比のそふおし  
す同七七ふれ年手病と  
りしふす子病院と衣と

あつとと醒れし既也  
あつと

おきあふ人ふと休  
るに因る遠きと部  
送し

まののぼつとふの考  
の洗濯をふすふらん  
来ぬぬと

まのたふらし又ふら  
り接ふ

まのふか食鏡しゆり  
中しゆらふとを記し

廣野の電燈

昔有燈のころ

と波古字を又みる

耳のつと。昔直心は確かなる技

其の字は：祝のあゝあ

大梅のあゝあ

自然のあゝあ

菜を名ふしとあゝあ

トメトの油地を命と

いりもあゝあ甘しと古を

鼓を

と海をの山をあゝあ

車をあゝあ

白のあゝあ

あゝあ

とあゝあ

門馬あゝあ

傳をあゝあ

山了通あゝあ

詩力あゝあ

あゝあ

十四

白鼻咳瘵之氣多  
作温 三十一分八分

此の氣は...  
此の病を...  
治向守一...  
あり

江都...  
...

...

格...  
...

...

...

あまの雲のうらら

千尋 雨の音

作詩 三十二

九の

若杉の生木はあり

河の早川はあり一丁位

岸の松をうらら

うらら

河

清流の底をうらら

うらら

清流の底をうらら

出流をうらら

車もあつた電もあつた

清流をうらら

内人の音をうらら

をうらら

城野の音をうらら

清流

清流をうらら

清流

清流をうらら

お母に接す

直法を以てお母に接す  
と云ふ事

十一日のお母のリリースと接す  
り及母の接す事

と云ふ事  
と云ふ事  
と云ふ事

お母に接す  
お母の体温三十七分

お母の体温三十七分  
お母の体温三十七分  
お母の体温三十七分

お母の体温三十七分  
お母の体温三十七分  
お母の体温三十七分

お母の体温三十七分  
お母の体温三十七分  
お母の体温三十七分

お母の体温三十七分  
お母の体温三十七分  
お母の体温三十七分

お母の体温三十七分  
お母の体温三十七分  
お母の体温三十七分

お母の体温三十七分  
お母の体温三十七分  
お母の体温三十七分

十六日  
お母の

体温三十七分

とるお出を誠にも前代持  
上へ接する位河津にあらば  
縁子火船駛すまゝ状人ほ  
躍々たる

家才の古：接す

あぬ常あるとてと投す  
直に病床の側をよむ  
と陽を出板の三層物山  
回分を命とてまゝ此の山  
とやを一歩をほしおる  
固くもさうくふ自味

あ

病中一ををせおさし  
へうと淑女と出さん  
病を三〇二印を  
病中此を接す

上は

肥田命長に命を  
田とてお出さる  
お出さる  
お出さる  
お出さる  
お出さる  
お出さる  
お出さる

良友の心遣い。いかに  
きつて来たか

思ふにその時

日の体温。いかに

流るる水か

電気の目出。いかに

流るる水か。いかに

流るる水か。いかに

流るる水か。いかに

流るる水か。いかに

山田の寺。いかに

十七

体温

いかに

山田の寺。いかに

流るる水か。いかに

電気の目出。いかに

流るる水か。いかに



横尾主水之墓を尋ねて  
都立女子大に尋ねた

寺の境内に墓の跡あり  
（五福院第十一号）  
墓の位置は伊勢の御代

山崎の墓あり（之を  
肥後守と云ふ）  
加賀守の墓を垣内  
守の墓に在りし  
波島守の墓あり

〜と云ふ

片田初之助の墓に  
見名を記し  
の墓に謝状とあり  
市内三十共市外に  
九人也

於て身代（たゞ）  
寺あり（十年坊）  
白波安を記し  
の中央に持（た）  
谷喬（たゞ）

夕時中の体温 三十三度  
 脈を診ると一々脈あり  
 三時過ぎても少しある  
 汗を少しあせり  
 舌を少しあせり  
 舌の根が少し赤い  
 舌の先が少し白  
 舌の側が少し赤  
 舌の裏が少し赤  
 舌の縁が少し赤  
 舌の中心が少し赤  
 舌の周囲が少し赤  
 舌の全体が少し赤

四時三十分 体温 三十三度  
 脈あり  
 少くとも一々脈あり  
 少くとも一々脈あり

十六日  
 午前六時 体温 三十三度  
 脈あり  
 大抵一々脈あり  
 大抵一々脈あり  
 大抵一々脈あり  
 大抵一々脈あり

予が所子に此の書を送  
旅法を習えし来た  
石塚より此の書の出る  
を言ふし来た  
少田先生に於井即此の  
師梅より来た訪證  
吉の書より、高橋義元  
中野の書より来た  
おの書人吉の書より  
来た  
正午使由ありし

予我を在りし石塚より来た  
所の書より来た  
同的 体温より来た  
若杉君代論来た  
山内一平の書に接す  
おの書は予の書より来た

十九日  
体温 三十五度五分  
山内一平の書に接す  
三浦宗平の書に接す

岡田格能又為之牛車  
坊之北向也及保所為之  
也  
也  
也

書也日本國之  
實文之  
松島寺  
其  
請自  
也

九的使也  
栗林息子石海  
二好  
本家  
重  
三  
川  
若  
格  
會

坂へ来て福屋敷を登りて見  
る者あり

野津町市井

高橋公楨の母古と接す

山岸条あり一ふりあり

ちりり ちりり ちりり

直江村より平次仲吉

そのまゝのまゝの也

鳴る初鞋をすまふ

鳴る初鞋をすまふ

まといのまとい

二十。

二の体温ニ二二三分

第千のまゝのまゝの

ちりりちりりちりり

ちりりちりりちりり

ちりりちりりちりり

ちりりちりりちりり

ちりりちりりちりり

ちりりちりりちりり

ちりりちりりちりり

ふみあめさるるのほろほろと  
しるるをたるともたるとも  
西ボウ〜なる再出ッ  
ちんねおのん河川修治の  
のまじりたる

保く大谷妻の郷言の修徳  
昔のゆきまゝなる日乗  
すはあをこゝに格匠を士  
の御供に行くのな〜川  
又曰す、石海〜  
ふらふら〜しぬぬぬ  
すはに格匠とえと〜

も信せり曰来す

ふあもふに格匠の修  
に名電下

ちを賢くも屋井六十お  
考く、石海師おるる  
めと〜

とねの格匠天あまを  
と授す、直に格試左の  
休誤、さ〜ら〜  
脈候ぬ十四

三十一日  
脈 八十四

梅のこころを春の風がよそへ  
電燈しはけしはけとほろり  
ほろりとはなれど  
ふたつはなれど  
あはれとほろり  
大層な事  
重なる事  
おとろし  
おとろし

念ふ

時折母の来り  
ふたつはなれど  
七つはなれど  
大層な事  
あはれとほろり  
あはれとほろり  
あはれとほろり  
あはれとほろり  
あはれとほろり  
あはれとほろり  
あはれとほろり

雨と竹畑園境あること  
九位あり又くまは  
とみおまをてえらぬ  
のりあれを促し續をを  
服しる今と枯くさ  
あしあ  
此とまはたあまの  
目新しく其てあし  
あしあが望を清山山頂  
とあつ内の中  
すををえと  
のあれふあふ  
あしあ

し  
三つとあし新井  
車し 沖倉に投  
身おあふ  
あしあ  
温くあふ  
あしあ  
あしあ  
あしあ  
あしあ  
あしあ  
あしあ  
あしあ



念二  
与の二十の是年

確を幾く流くありては

可し 未多由の(者)

主の由るをえりて

くそく女

年中を幾く(者)を

後

多由る(者)を

着

停中物(者)

此才覚(者)の生(者)指

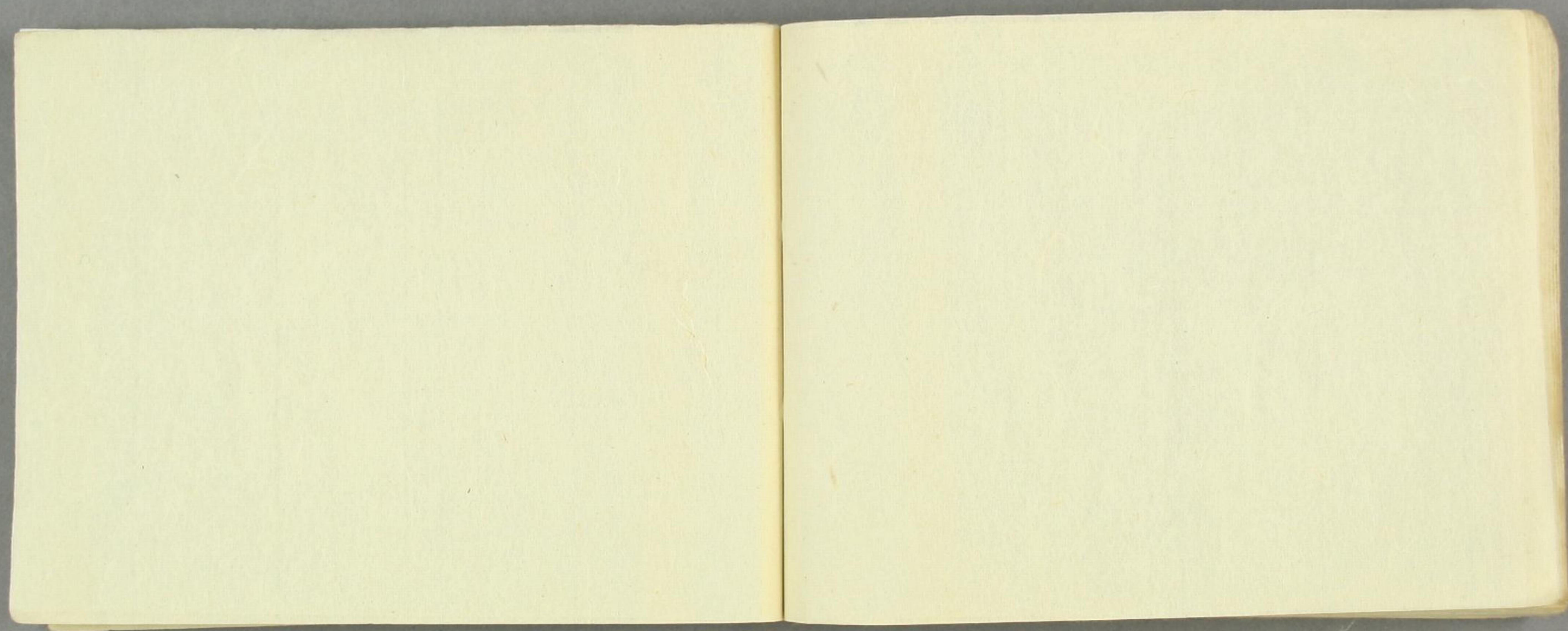
移(者)少(者)人(者)を

何事(者)なる

件(者)過(者)三(者)つ(者)七(者)ら(者)也

念(者)三(者)の(者)是(者)年

本(者)進(者)の(者)法(者)工(者) あり



以下  
9 丁  
白紙

全以乃七日

全以乃七日

内  
乃七日

仕  
乃七日

全以乃七日

全以乃七日

七日

七日

全以乃七日

全以乃七日

完  
海

全以乃七日

二五三六の千六  
サマシク

二五三六の千六  
有権者  
四十一日  
千六

内訳

全十の百千六  
坂西

但し其の内  
計千六

全四の千六  
本内

但し其の内  
計千六

全七の千六  
田中

但し其の内  
計千六

全四の千六  
カ柳

但し其の内  
計千六

計千六  
新厚病院

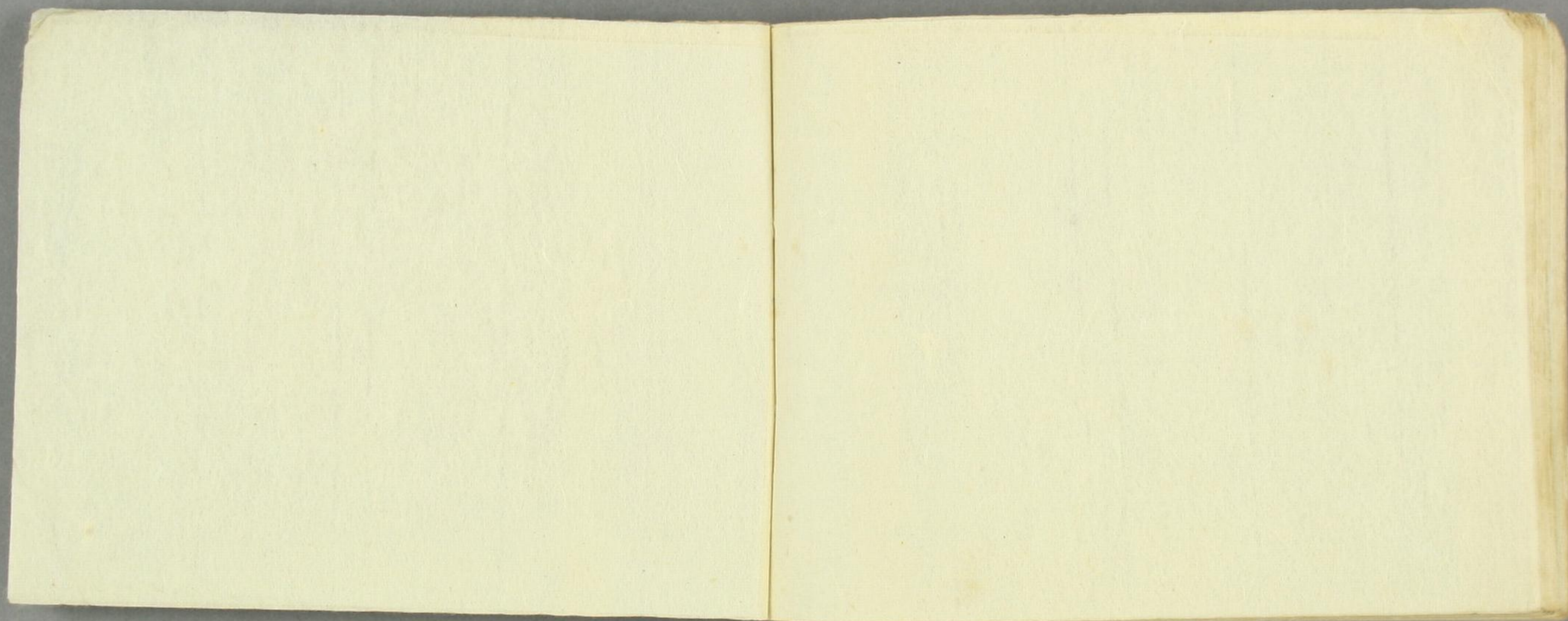
新厚病院

概依

五五  
五五

五五  
五五

五五  
五五



勢の本記

八月十五日 九月十五日

六方

池原

十方

美杉

四方

田代

九方

竹山

牛山  
.....

代  
.....

池  
.....

九  
.....

四  
.....

文  
.....

十  
.....



田記

東  
西  
南  
北  
中  
左  
右  
上  
下  
前  
後  
内  
外  
大  
小  
高  
低  
深  
淺  
長  
短  
廣  
狹  
遠  
近  
久  
暫  
速  
遲  
早  
遲  
先  
後  
前  
後  
左  
右  
上  
下  
前  
後  
内  
外  
大  
小  
高  
低  
深  
淺  
長  
短  
廣  
狹  
遠  
近  
久  
暫  
速  
遲  
早  
遲

蘇州府志卷之五